

2017年度 聖学院大学総合研究所
 聖学院大学人間福祉スーパービジョンセンター主催・SWnet 共催
 第21回ピア・スーパービジョン報告



小沼聖治先生（中段左）、助川征雄先生（中段右）

2018年2月3日（土）、聖学院大学4号館4402教室（第一会議室）を会場に、「第21回ピア・スーパービジョン」（聖学院大学人間福祉スーパービジョンセンター主催・人間福祉学科・SWnet（聖学院ウェルフェアネット卒業生を中心とする福祉のネットワーク）共催）が、27名の参加により行われた。開会あいさつは、助川征雄氏（聖学院大学大学院人間福祉学研究科客員教授）が、また、総合司会は山田裕太氏（SWnet）が、それぞれ担った。なお、助川氏からは、「ピア・スーパービジョンとは何か」の資料も提供された。

第1部の講演は、小沼聖治氏（聖学院大学人間福祉学部人間福祉学科助教）により、「実践における「ゆらぎ」を専門職としての成長へつなげるために一見習いスーパーバイザー奮闘記より」の論題のもとに行われた。小沼氏は、自身の体験と知見とをもとに、「ゆらぎ」を、「援助者、クライアント、家族などが経験する動揺・不安・迷い・わからなさ・不全感・挫折感等の総称」と規定したうえで、社会福祉の実践は、「ゆらぎ」に直面し、その体験から学ぶことで、専門性や技術性を高めることができる、すなわち、

「ゆらぎ」は社会福祉実践の原点であることを強調した。その「ゆらぎ」と向き合う過程における、多角的な視野と、しなやかなかわりの必要性、また、バランスのとれたスーパービジョンが「ゆらぎ」を成長につなげるためには不可欠であることが説明されたうえで、その過程が、「ゆらぎとの向き合い＝俯瞰」→「ゆらぎの言語化」→「ゆらぎを活用する糸口へ」と、図示されたことは聴衆の理解を明確化させることに大きな力となった。実践を踏まえた総括として「ゆらぎ」と自然に向き合える風土（環境）の重要性が指摘されたことも、「ゆらぎ」を自己の努力に帰結させがちな現状改善への指針として聴衆も認識を新たにしたことであった。

第2部「ピア・スーパービジョン」では、「介入」のタイミングのむずかしさを通して感じる、『手は尽くしてきたけれど、あのときどうすべきだったか…』という思いへの向き合い方、あるいは、「支援の方向性と当事者の意志の差異への向き合い方」等の、具体的な「ゆらぎ」に直面している事例が紹介され、参加者の多様な経験と職種における専門性からの語りあいが行われた。その中で、個々のケースにおいて、ポジティブにうけとる事象の確認、当事者の目的意識を把握する大切さが共有された。小沼氏からは改めて、「ゆらぎ」を感じるものの背景にある課題認識と、「ゆらぎ」のレベルの客観視のためにも、ピア・スーパービジョンが大切であり、また、そのピア・スーパービジョンにおいても利害関係は生じるものであるから、それを理解したうえで、利害関係を超越していく指向の必要性が指摘された。

閉会にあたり、相川章子氏（聖学院大学人間福祉学部人間福祉学科教授）から、「ゆらぎ」が成長につながる、という原点の確認と、日本の現状についての示唆（哲学の共有の弱さ）がなされ、次回の再会を約したことであった。

（文責：小野久志 [おの・ひさし] 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究所博士後期課程）